

『報知新聞』学芸欄の成立

新聞メディアにおいて紙面に文芸欄または学芸欄を設ける動きが広まるのは、大正半ば以降のことである。各紙とも最初は小さな欄にすぎなかったが、やがて紙面の拡張とともに文芸や学芸関係の記事が充実していき、今日の新聞各紙における文化面へと発展していくことになる。

大正後期における文芸欄や学芸欄の紙面に占める比重は、決して大きなものではなかった。しかし、それらの欄に掲げられる文壇や論壇の月評、さまざまな書き手による随筆などは、文芸雑誌よりもはるかに多数の読者をもつ新聞メディアをとおして、文化的な関心を幅広く社会に浸透させるうえで少なからぬ役割を果たしたのではないだろうか。

文化セクションの名称としては、文芸欄が文学・芸術を中心としたものであり、学芸欄はそれよりもカテゴリーが広く、学術・科学・社会思潮なども含んだ意味合いをもつ。ただ、文芸欄あるいは学芸欄という名称は同じであっても、各新聞によってそのコンテンツはさまざまに異なり、そこにはそれぞれの新聞の特色をうかがうことができるだろう。

ここでは大正期における代表的な新聞メディアとして『報知新聞』を取りあげ、当時のジャーナリズムの状況と学芸欄が成立する経緯、およびその特色について検討していくことにする。

関 肇

新聞の文芸欄と学芸欄

『文芸年鑑 大正十五年版』（一九二六・二、二松堂書店）は、前年の文壇の動向を回顧し、「新聞の文芸」という見出しのもとに次のように記している。

近年になつて、新聞の文芸欄は殖えたやうであるが、「文芸欄」そのものとしてよりも、「学芸欄」といつたやうな形式で取扱つてゐる新聞が多くて、純粹の「文芸欄」といふのは、「都」「読売」「時事」新しいところでは「中央」位のものである。そして、新聞社としては、重要してゐない傾きがある。いや、重要どころか、ます／＼虐待の傾きだ。が、新聞社が一般に「文芸欄」の必要を認めてゐることは事実で、一面からいふと、それだけ文芸の社会侵潤の程度が広がつて来たわけである。

ここでは文芸を中心とする立場から、新聞各紙に文芸欄がふえたことを歓迎しつつも、それらが「純粹の「文芸欄」とは趣を異にすることへの不満が表明される。引用部に続いて、「そも新聞の「文芸欄」の意義は文芸の趣味を広く行き亘らせるといふところに唯一の使命が

あるのではなからうか。(中略)もつと力瘤を入れて、文芸の普及に努力すると同時に、文壇の活気をも掻き立てるやうに力めてほしいのである」と注文を付けてもいる。

そのような「純粹の「文芸欄」がある新聞としては、『都新聞』『読売新聞』『時事新報』そして『中央新聞』が挙げられているが、なかでももつとも長い歴史をもつのが、文学新聞と称された『読売新聞』であることはよく知られている。日清戦争後まもない一八九五年六月、『月曜附録』の創設にはじまる同紙の文芸欄は、やがて島村抱月、正宗白鳥、上司小剣らの活躍により常設化され、自然主義文学のひとつの拠り所となっただけでなく、大正文壇の隆盛に大きな役割を果たした^①。次いで、福沢諭吉が創刊して充実した経済記事に定評のあった『時事新報』も、一九〇九年十二月に文芸欄を創設し、大正期にかけて豊富な文芸記事を毎日掲載してその振興に努めてきた^②。また、以前は花柳新聞と見なされていた『都新聞』は、一九一九年に福田英助が買収して以来、経済面や家庭面を重視して紙面の充実をはかり、一九二二年一〇月に文芸欄を創設、その三年後の一九二五年九月からは第一面の紙面を飾るようになる^③。そして小新聞の『絵入朝野新聞』の流れをくみ、通俗的な読物を多く掲げた『中央新聞』は、一九二五年五月から文芸欄を設けたばかりだった。

一方、東京の主要紙で常設の学芸欄をもつのは、『東京朝日新聞』『報知新聞』『万朝報』であった。周知のとおり『東京朝日新聞』では、これより先、一九〇九年一月から約二年間にわたり、夏目漱石が「朝日文芸欄」を主宰したことがあったが、主筆の池辺三山が辞職する要因となったために廃止され、それからしばらくは文学や芸術関連の記事を掲げる一定の欄をもたなかった。しかし、一九二二年二月の夕刊発行を機に朝刊の紙面にゆとりができると、学芸面が拡充され、翌年

二月に常設の学芸欄が確立された^④。そしてその動きと前後するかたちで登場するのが、『報知新聞』の学芸欄である。同紙については後に詳しく見ていくが、一九二二年一月から最初は文芸欄として出発し、同年一二月に学芸欄へと改称されている。また、『万朝報』でも、それまで設けられていた文芸欄が、一九二五年一月から学芸欄となり、演芸や学問その他の文芸以外の多様な記事を掲げるようになる。

こうした文芸欄と学芸欄という名称の違いはあっても、それによって新聞各紙を単純に色分けすることはできない。むしろ両者の区分は、きわめて曖昧であるといわざるをえないだろう。それらの欄のコンテンツは、各新聞の特色をさまざまに反映したものとなっているのである。

ただここで注意したいのは、「実際からいふと、新聞の文芸欄は、趣味的に傾いたり、又は「学芸欄」と命名されてゐるやうに、学術的な記事が多かつたり」(前掲『文芸年鑑 大正十五年版』)するとあるように、総じて当時の趨勢が、新聞の文化セクションを狭く文壇に関する文芸記事にかぎるのではなく、幅広く趣味や学術その他の記事を掲げる方向に向かつていたことである。ちなみに、東京の有力紙のなかでも『東京日日新聞』は、昭和初期まで独立した文芸欄や学芸欄を設けず、定期的に多様な文化記事を掲げていた。また、『国民新聞』には、かつて高浜虚子が主宰する「国民文学欄」があり、漱石の「朝日文芸欄」と並び立つ存在となっていたが、明治末年には消滅し、大正後期からは徳富蘇峰の「近世日本国民史」が連載される紙面の下段に、特定の欄名をもたずに文芸ないし学芸関係の記事を掲げていた。

『時事新報』の編集局長を務めた伊藤正徳は、「大正年間新聞紙面のいろいろの方面に進化の段階を画した謂はブルネツサンス時代」であったと評している^⑤。新聞メディアは、たんなる報道機関であるにとどまらず、言論による指導的地位を徐々に確立していくとともに、そ

の紙面の質と量においても一大飛躍を成し遂げた。なかでも編集局における社会部の地位とその記者たちが担当する紙面の性格には、劇的な転換がもたらされた。すなわち、「従来は主としていはゆる警察種と市井の民衆的事件を取材の中心としてゐた社会部が、社会的事件であつて、いやしくもそれが国民生活に直接関係のある問題である限り、政治、経済、思想、文化の区別なく、ことごとく挙げて社会部記事の対象とするにいたり、(中略)事実の報道とともに解説的記事となつて社会面へ現れて来ることになつた」のであり、「斯くて社会面は漸く『三面記事』の異名から脱却し、紳士淑女の見るべからざる所であつた此の紙面が、社会の上下を通じて一般に必ず眼を通す面となり、販売政策の上からも、社会部の紙面が最も重要な役割を果すことになつた」のである。しかも、そうした紙面の大きな変化は、他方で学芸や運動にかかわる職掌を社会部から切り離す動きにもつながつた。

伊藤正徳によれば、「社会部の一隅に、居候然と席を占めてゐたに過ぎなかつた学芸部と運動部が、独立の一部として編輯局内にその存在を明かにし、紙面の上に於ても重要な地位を獲得するに至つたのも、大正期の後半期に於てである」という。大正末から昭和初年にかけてスポーツ時代が現出し、運動記事が毎日の紙面の一角を占めるようになっていったのと同様に、「大正期に入つて『文化』といふ言葉が生れ、文学、美術、演劇、音楽、映画等への一般の興味が昂揚して来ると共に「学芸部」が社会部の片隅から独立した。そして新聞紙の文化的使命の達成が唱へられるに至つた」のである。それとともに学芸欄は販売政策にも利用され、やがて婦人欄、ラジオ版をもその傘下に集め、次第に勢力を拡張していく。そして「学芸欄の長足な発展とその重要性は、新聞紙の雑誌化の世評を起す一因とまでなつた」とされる。とはいえ、新聞と雑誌の記事の性質は、とりわけ文芸に関して見る

なら、必ずしも同じではないことに留意する必要があるだろう。新聞各紙に文芸欄や学芸欄が増えてきたことを受けて、雑誌『新潮』の合評会では、一九二五年三月(第二二回)と六月(第二五回)に新聞の文芸欄の問題を取りあげている。第二二回合評会は、徳田秋声、菊池寛、久米正雄ほかの文学者が集い、文壇的な立場から、「新聞の文芸欄と月評との関係ですが……それは新聞の文芸欄から月評を取つて了へば、文芸欄の意義の殆ど大半はなくなつて了まやすまいかと思ふ」、「僕は新聞の学芸欄は馬鹿氣て居ると思ふ。(中略)学なんといふことは新聞などでやるべきものでないと思ふ」(中村武羅夫、傍点引用者)、「月評は……少くとも時評といふものを取つて了へば新聞の文芸欄といふものは……」(久米正雄)というように批判的な意見が寄せられた。それに對して、新聞各社の文芸欄や学芸欄の担当者を集めた第二五回合評会では、編集者の立場からまったく別の見方が示された。『都新聞』の上泉秀信と『報知新聞』の佐近益栄は、新聞の文芸欄の読者について次のように述べている。

上泉。 文芸の読者といふのは、僕らが考へてゐるよりも外に、知らない変な所に随分多いんですよ。例へば相場なんかやつて居る人に非常に文芸欄を読む人が多いとかいふやうにですね。又、色んな人の話なんか聴いても、実に意外な所に文芸欄の読者があるといふことが分りますよ。(中略)マア文芸の読者といふものは、文芸のディレクタント以外にも随分多いと思ひますね。
佐近。 雑誌の文芸読者と新聞の文芸欄の読者とは、種類が違ふやうですね。

さらに、高浜虚子の「国民文学欄」時代から文芸記者を務めてきた

『国民新聞』学芸部長の島田青峰は、学芸欄の擡頭した理由をこう説いている。

島田。(前略) 最近は殊に文芸ばかりぢやなく、学芸の方面を各新聞共にやつてますが、それで、マア一つは新聞の体裁から言ってもどうも置かなくぢやならないし、或は科学的——サイエンスの方の智識を普及するとか、又その需要があるとか、さういふやうな意味で段々と学芸欄が旺になったのぢやないかと思ふのですね。それで、純粹の文芸物を載せるよりはですね、誰でも分るやうな学芸的の記事を載せる方が反響があるらしいですね。純粹の文芸物は、文壇の人——若い人だけで、他の読者には余り興味がなぢやないかと思はれるふしもあるやうです。私の身勝手はいへば、文芸欄は無い方がいゝ。うるさくなくて……。(笑声)

新聞の編集者たちは、一握りの「文芸のディレクタント」ではなく多様な一般読者を想定し、その知的関心に応える文芸欄や学芸欄を作ろうとしていくのである。この新聞社側と文壇側との立場の隔たりは、新聞の発行部数が増加し、読者が多数になっていくにつれて大きなものとならざるを得ないだろう。新聞メディアは、第一次世界大戦後の経済界の活況を受けて急速に発達し、さらに関東大震災後の東京紙においては激しい勢力争いが繰り広げられていくことになる。そのような中で、大正期にもっとも有力な東京紙であった『報知新聞』の学芸欄は、どのような経過をたどって成立したのだろうか。あらためてその前史にさかのぼって見ていくことにしたい。

「日曜文芸」欄の試み

『報知新聞』学芸欄のルーツは、一九二〇年一月四日から掲載がはじまる「日曜文芸」に求めることができる。その前年末に発表された社告「新春の新計画」(一九一九・一二・九夕刊)には、「平和第一年に入りて世界万般の事象は将に一大変革に転ぜんとす、本社は此大勢に順応すべく不断的努力を払ひつゝある」とあるように、第一次世界大戦後のパリ講和会議や国際連盟設立などの平和への気運が高まっていることに呼応するかたちで、純文芸小説、婦人界、家庭相談部、文芸欄という文化や生活に関する四つの企画を打ち出している。

まず純文芸小説としては、「従来の家庭小説以外に純文芸に属する創作を初刊号より掲載すること、し先づ文芸界の寧馨児宇野浩二氏に囑して其労作を求め引続き新進作家を紹介す」とある。また、婦人界については、新たに「一欄を特設して従来よりも更に一層此方面に努力を払ひ以て婦人関係の記事を豊富ならしめ進んでは今後生起し来る可き一切の婦人問題にも触る可し」とあり、家庭相談部とは、「日常家庭に起る諸般の問題の質問に応じて明確なる回答を与へて以て家庭の指針たることを期し」たものとされる。そして文芸欄に関しては、「一週一回文芸欄を設け最新文芸に対する厳密なる批評紹介を為すこととせり」というのである。

『郵便報知新聞』から『報知新聞』へと改題(一八九四・一二・二六)して以来、それまでの論説本位を脱して平易な大衆向けの新聞へと転じた同紙は、娯楽的な読物と家庭記事の充実に力を入れることによつて順調に紙数を伸ばし、一八九九年には「東京各新聞社中、発行部数常に第一たる地盤を確立」し、一九〇六年にはいち早く夕刊を発行する

などして東洋一を誇るようになっていた。^⑥ そうした中で、従来の文芸と家庭にかかわる紙面の刷新と一層の拡充をめざしたのが、社告「新春の新計画」であるといえるだろう。

この新しい企画の立案と実施を主導したのは、のちに「銭形平次捕物控」などの大衆小説で知られ、文芸はもちろんのこと音楽や美術にも造詣の深かった野村胡堂（本名・長^{おさか}）であると考えられる。^⑦ 一九二一年に報知社に入り、政治部の外交記者を振り出しに、二年後には「招かれて社会部夕刊の主任」となっていた胡堂が、「社会部の音頭を取つて、部長といふものに祭り上げられ」るのは、ちょうどこの年のことである。社会部長として「新聞に専念させる為に、社の方針で他の新聞雑誌に一切書くことを禁じられ、暫らく胡堂といふ雅号も、実際に用ふる折もなく、権利だけを留保して、温めて置いた」という彼は、ひたすら編集の仕事に精力を注ぐことになる。

社告「新春の新計画」の筆頭にあげられた純文芸小説は、主に新進作家による連載三〇回前後の中篇小説が朝刊の第一面を飾った。宇野浩二「女人国」（一・三・三・一〇）にはじまり、次の室生犀星「海の僧院」（三・一・一・四・一七）の後には、徳田秋声「春から夏へ」（四・一九・五・二二）のような中堅作家の連載もあるが、以後は宮地嘉六、南部修太郎、国分まさを、須藤鐘一、藤森成吉などの新人が起用され、同年一二月の紙面改革で朝刊一面が全面広告になると、夕刊一面に発表舞台を移し、関東大震災の翌年まで続いている。^⑧

一方、「日曜文芸」としてはじまる文芸欄は、必ずしも計画どおりにはいかず、やがて六月末には掲載が途絶えている。その半年間の「日曜文芸」欄の記事は次のとおり（日ごとの連載読物・短文・新刊紹介などは除く）。

1・4	労働者と文学	* 評論	長谷川天溪
1・11	大正九年の思想界	* 評論	三井甲之
1・18	リアリズムの文学	* 評論	水守亀之助
1・25	小曲三篇（「赤き音匣」 ^{おとこおる} ）	* 創作（詩）	西條八十
2・1	一夜の感想	* 随筆	宮島新三郎
2・8	一千一秒物語	* 随筆	佐藤春夫
2・15	社会より忘れられんとする文壇	* 評論	江口渙
2・22	竹本一座	* 創作	宮地嘉六
2・29	隣人	* 創作	室生犀星
3・14	読んだ物のうち	* 評論	吉田絃二郎
3・28	作家と批評家	* 評論	片上伸
4・4	散歩	* 随筆	久保田万太郎
4・11	姉	* 創作	加藤武雄
4・18	黒い絹手袋	* 創作	南部修太郎
4・25	田舎と人間（田舎、人間、六文（寓話））	* 随筆	小川未明
5・2	二晩どまり	* 創作	若山牧水
5・9	米国婦人と愛蘭問題	* 評論	白井亀雄
5・23	猿のひとり言（寓話）	* 創作	藤森成吉
5・30	恐慌来！	* 創作	佐々木味津三
6・6	極楽入り	* 創作	毛利辰磨
6・20	暗い影	* 創作	江馬修
6・27	印度洋の一夜	* 創作	三島章道

文芸欄の開設にあたっては、「最新文芸に対する厳密なる批評紹介を為す」と謳われていたが、その方針は長続きしなかった。当初の文芸欄の趣旨を実現するには、それにふさわしい批評家の執筆陣をそろえる必要があっただろう。しかし「日曜文芸」では、最初に長谷川天溪、三井甲之、水守亀之助が新しい文芸や思想の動向について寄稿したにすぎず、以後は詩、随筆、掌篇小説やコントなどの創作が多くなっていく。そして三月以降は不掲載日も出はじめ、新進作家による一回読み切りの創作欄へと変質した「日曜文芸」は、途中で頓挫を余儀なくされるのである。

こうした文芸欄の不振とは対照的に、婦人界と家庭相談部についての企画は、着実な展開をみせていく。まず、読者からのハガキによる質問に記者が答える「家庭相談」欄が、一月二日から新設され、数日ごとに朝刊の社会面の片隅に掲載されるようになる。そこには「薬店で売って居るベルツ水を家庭で造る薬品と其分量をお教示下さい」、「汽車旅客の手荷物の無賃量を伺ひます」などの問いとそれへの簡潔な回答が、数項目まとめて並記されている。また、「婦人欄」が夕刊二面に常設され、「婦人労働の信仰個条」「チューリップ一顆一万数千円」(二・五)といった無署名記事、井上友子(女医)「米国婦人の保健活動」(二・七)のような談話、懸賞募集による「物価騰貴の苦難を切抜けた私の生活法」(四・一三・六・二)の連載など、多様な記事が紙面を飾っている。

しかも六月一六日からは、紙面が従来の朝刊四頁から六頁(朝夕刊合わせて一〇頁)へと拡張され、経済面と家庭面が各一頁に独立する。それにともない「婦人欄」と「家庭相談」は家庭面に集約され、婦人問題や家庭生活の記事のほか写真や挿絵なども添えて、さらに充実していくことになる。

新設の家庭面では、社会部記者の矢田挿雲による文芸読物「江戸から東京へ」(一九二〇・六・一六―一・三〇、続篇一二・一・一九三三・九・一)の連載もはじめられる。東京の「下町辺の児女の心に深く根を卸してゐる炉辺閑話」としての伝説を中心に書きとめたこの読物について、挿雲は「東京回顧録を私に書かせようとした点を手柄だとすれば、其の手柄^(マ)は野村胡堂君と編輯局長高田知一郎君とに帰すべきもの、私わ^(マ)一兵卒として命ぜられるまゝに動いたに過ぎない」(「処女作の追憶」『大衆文芸』一九二六・七)と述べている。その「江戸から東京へ」というタイトルも、胡堂がつけたものだった¹⁰⁾。

さらに、家庭面とともに独立した経済面において、「科学と発明」という新しい欄が登場する(一九二〇・六・一六創設)ことにも留意したい。「科学と発明」欄は、のちに成立する学芸欄に合流していくことになるからである。その記事には、たとえば植物の開花に日照時間が及ぼす影響を説いた「夏咲く葦——昼と花の関係」(六・一六)、米国の透視能力をもつ女性を取りあげた「第二視力の女——ジャメー夫人」(六・一七)、X線の幅広い用途についての「X線の応用——古書画の鑑定」(六・一八)、疫病の発生原因は彗星にあるとする臆説を紹介した「彗星から疫病——実例とその研究」(六・一九)など、実際の応用科学から疑似科学の類までが、平易な文章で分かりやすく解説されている。そして同じ経済面では、翌年一月から遊軍記者の本山荻舟による史伝「日蓮」(一九二二・一・五―九・四)、「近世剣客伝」(一九二二・九・二八―一九三二・七・二二)の連載も行われていく。

科学関係の記事や本山荻舟の史伝が経済面に掲げられることは、経済活動に関心の高いサラリーマンや商工業者などの知識人層の読者を想定したものであることをうかがわせる。そうした文学愛好者にかぎらない幅広い読者を想定した紙面づくりの姿勢は、やがて再開される

文芸欄にも通底していると考えられる。

文芸欄から学芸欄へ

長らく途絶えていた文芸欄が再登場するのは、一九二二年一月二〇日のことである。『報知新聞』では同日から朝刊の紙面を二頁拡張して八頁（朝夕刊合わせて二二頁）とし、ニュース本位にもとづき主に政治経済の記事を充実させていく。その増頁された経済面の一隅に、しかも今度は常設のかたちで文芸記事が掲載されるようになるのである（月曜を除く）。

このときから文芸欄は本格的に歩み出すわけであり、おそらくそれも社会部長の野村胡堂が道筋をつけたものと考えられる。彼は新聞報道における「特だね主義」を批判した文章で、「材料の選択はパー・マンの常識として国民生活に影響のあるものを取り、其の最も大なるものを大きく扱ふのは当然だが、同時に、相当の趣味のあるものや新しい匂ひのあるものを取りたい」とし、次のように述べている（野村長）「最大禁條は他新聞に対する虚栄心——読者に親切忠実なる事——」（『新聞及新聞記者』一九二一・四）。

それから此頃の新聞は一体にぎす／＼してゐる。（中略）併し其の間にも出来るだけ柔らかな気分を注入して、読者に親しみを持たせたいと思つてゐる。例へば、社会問題や政治問題も大切に違ひないが、同時に、読者個人個人の日常生活に直接に関係のあるやうな材料——さう云ふものを入れたいと思つてゐる。

又読者に親しみを持たせたいと云ふ点から、記事の文章は出来るだけ平易にし、ペダンチックになつたり専門的になつたりする

事を避け、材料の扱い方をも色々に考へてゐる。

とかく無味乾燥になりがちな経済面に、それとは一見相容れない文芸欄が常設されることになったのは、こうした「出来るだけ柔らかな気分を注入して、読者に親しみを持たせたい」という方針によるものだろう。その新しい文芸欄には、近年の思想界や読書界の趨勢を論じた昇曙夢「最近文壇の傾向に就いて」（二・二〇）を皮切りに、新劇の勃興に期待する三島章道「新時代の劇芸術として——一般的に見た去年と今年の劇場」（二・二二、二二二）、ブルジョワ文学とプロレタリア文学を対比した細田民樹「ふたつの傾向——或人への手紙より」（二・二四、二二五）、労働と人生、芸術、婦人問題についての感想を述べた島崎藤村「二三の事実」（二・二六）、作歌の機微にふれた金子薫園「歌は消閑の具か？」（二・二七）、婦人雑誌の低俗さを嘆じた加藤武雄「一つの事実」（二・二八）、舞踊芸術の新運動に時代意識を求める小寺融吉「新舞踊劇の曙光」（二・二九、二・二一）、マгдаレン・マルクスの著作を紹介した有島武郎「マルクス女史の『女』に就いて」、山岡文三「詩一つ」（二・二二）など、文壇の大家から若手まで幅広く起用して、文学・演劇・芸術・舞踊・思想などの多岐にわたる内容をいづれも平易な文章で掲げている^①。なお、はじめはこの欄に欄名がなかったが、二月九日から「文芸欄」と表記されるようになる。

また、この文芸欄の出版と軌を一にして、懸賞小説の募集も開始される。社告「六千円の賞金を懸けて長篇小説募集」（一九二一・一・三二夕刊）には、「新時代の要求に副ふべき、清新なる趣味を鼓吹する為、本社には広く読者諸君に、紙面を公開して、（中略）之に依て紙上に一新生面を開き、隠れたる作家を紹介する」とあり、審査は編集局で行うとしている。その企画の趣旨が、文芸欄の設立と響き合うものである

ことは明らかだろう。おりしもこの年は、『報知新聞』創刊五〇周年にあたり、鉄筋コンクリート五階建ての耐火建築による社屋を新築するとともに、多くの記念事業の計画が立てられるが、そのひとつに「文芸の奨励」があり、懸賞小説は目玉企画として位置づけられた。

こうして文芸欄がはじまり、懸賞小説の募集が発表された直後の一九二二年二月、野村胡堂は健康上の理由から社会部長を退き、調査部長に就任している。ただ、文芸関係の仕事は引き続き統括していたらしく、五月には調査部内に新たに学芸部が設けられ、その部長を兼任することになる（『報知新聞幹部異動』『新聞及新聞記者』一九二二・一「報知新聞社学芸部新設」同、一九二二・六）。激職から離れた彼に、社主の三木善八と編集局長の高田知一郎は小説を書くことを慫慂し、「書くからは、沢山書いて有名になった方がいい、他の新聞へ書くのは困るが、雑誌や単行本なら、いくらでも書け」とおだて上げたという¹²。それに応えて胡堂は、新聞製作のかたわら「小説二万年前」（一九二二・五・三／八・一六夕刊）を連載し、小説家としても活動しはじめる。

胡堂が主宰するかたちで再出発した文芸欄が「学芸欄」と改称されるのは、同年一二月一日に行われる紙面刷新によってである。それまでの文芸欄は、経済面の片隅に置かれていたにすぎなかったが、このときから紙面の三段分を割いて独立した学芸欄が編成されていくのである。面目を新たにした学芸欄には、文芸記事だけでなく消息や新刊紹介も掲げ、別の頁にあった「科学と発明」欄も組み入れられた。この「科学と発明」欄を加えたことが、文芸欄から学芸欄への改称をもたらしたことはいうまでもない。さらに翌年一月二五日からは、従来は末尾の頁にあった連載小説が学芸欄の下部に移されている。それによって合わせて紙面の五段分を占めるようになり、学芸欄の存在がさらに際立つのである¹³。

関東大震災の翌年五月、「日曜文芸」時代から学芸欄の成立までを担ってきた野村胡堂は編集局相談役となり、調査部長には生駒糸蔵が就任する。生駒は朝翔という別号で、『洪沢栄一伝』（一九〇九・一、有楽社）、『（秘史）新日米外交の真相』（タウンゼント・ハリス手録、一九一三・一一、金港堂）などの著訳書があり、囲碁、将棋、相撲、芝居などにも明るかった¹⁴。その野村胡堂および生駒糸蔵の監督のもと、学芸関係の実務をこなしていたのが、先述の『新潮』第二五回合評会に出席していた佐近益栄だった。

郷里の師範学校を卒業後、小学校教員を経て一九二〇年五月に報知新聞社に入った佐近益栄は、本来は小説家を志し、その前年には『大阪朝日新聞』の懸賞長篇小説に応募している。このときは内田魯庵、幸田露伴、徳田秋声が選者で、吉屋信子の「地の果まで」が一等に選ばれ、佐近の「一滴の露」は選外佳作となった（『大阪朝日の長篇当選——募集文芸発表／元旦より連載』『大阪朝日新聞』一九一九・一二・二五）。彼はこれを機縁として徳田秋声に師事するようになり、「同氏のお世話で上京して報知新聞社に勤務することになった」とされる¹⁵。野村胡堂が社会部長の時代にその配下として働いた佐近には、「コードモホウチ」欄に掲げた記事を集めた『（科学）童話夢ノナイ国』（一九二四・七、報知新聞社出版部）のほか、後に寺田瑛らと交代で書いたコントを収録した報知新聞社調査部編『談話室』（一九二九・一二、千倉書房）、『ナンセンス・ジャパン』（一九三〇・五、同）などの著作がある。昭和初年には学芸部主任を務め、短篇小説をいくつか発表して注目されるようになるが、一九三〇年一二月に急性肺炎で死去する。

佐近益栄は『新潮』第二五回合評会で、学芸欄を編集する苦心に関して、適切な寄稿家が少なく期待どおりの原稿が得られないこと、月評家の人選の困難、長い原稿の取り扱いにくさや締め切りが守られな

いこと、学芸部の人員の不足などを挙げている。そして純粹の文芸欄を望み、学芸欄には批判的な司会の中村武羅夫に対して、佐近は「文芸でも矢張りどうかといふと、趣味化されて居るとか或は思想化されて居るものとかの方が読まれるですね。……といふよりは寧ろさういふものを問題的に扱ひ、思想的に書いてあるもの……、(中略)今日にあつてはそんなものが無さ過ぎるから」と異論をはさみ、次のように述べている。

佐近。学芸の「学」も文芸の一門だけれども、今のところは文芸は狭ま過ぎて居るから、あゝいふものを入れる要求を感じる。もつと文芸の範囲が、広ければあゝいふものも当然論じられる。つまり文芸の材料までも論じられる。(あゝいふものが今に論じられるやうになると僕は思ふ)それを論じられない今日では、文芸といふものはもつと狭いものに見られて居るから、あゝいふものが必要になつて来るのではないかと思ふ。僕の考では所謂文芸といふものと、所謂学問といふものとは同等な要求を以て迎へられて居る。

中村。文芸欄の読者と、学問欄の読者とは違はないですか。

佐近。違はないと思ひますね。

当時の文芸における題材の狭さについて、佐近は「兎に角日本の小説には、社会といふものが、少ししか注意されてゐないといふことは事実ですね。だから西洋流に社会問題に興味を持つて居るものには、価値が少いと思われるでせうね」とも述べ、小説の月評は一般の社会問題にふれた評論や感想よりも読者が少ないことを指摘している。そうした佐近の見解を裏づけるように、この頃の『報知新聞』の月評は

縮小される傾向にあった。同紙の月評は、一九二二年七月に加藤武雄の執筆ではじまり、一月から生田長江により一年余り続いたが、その後は月評家が毎月交代するかたちをとり、やがて数ヶ月に一度しか掲載しなくなつていた。そして文芸だけでなく音楽や美術、さらには思想や宗教、社会問題なども取りあげ、土田杏村、帆足理一郎、杉森孝次郎といった哲学者や評論家による学術的な寄稿が散見されるようになるのである。

文芸から学芸へとカテゴリーを拡張し、芸術や学問を幅広く網羅して一般読者の知的な関心に応えようとするその編集のあり方は、大正デモクラシーを経由した教養主義の大衆化をはかるものと見ることができるかもしれない。ただここで注意したいのは、旧制高校を中心とする青年層を支配していた教養主義が、「政治といふものを軽蔑して文化を重んじるといふ、反政治的乃至非政治的傾向をもつていた、それは文化主義的な考へ方のものであつた。(中略)それは文学や哲学を特別に重んじ、科学とか技術とかいふものは『文化』には属しないで『文明』に属するものと見られて軽んじられた」の¹⁶に対して、学芸欄には科学記事も並んでいたことである。『新潮』第二五回合評会では、中村武羅夫と佐近益栄が以下のような応酬を繰り広げている。

中村。『報知』には科学の話がありますね。

佐近。あれ位は文壇の人でも可なり興味を持つて居る者があるだらうと思ふのです。

中村。さうすれば文学雑誌でも、ラヂオの話を入れる必要があるといふことにもなる。だが(中略)取合せ上何もそんなものは入らなくても……

佐近。それは読者の年齢や好みで違ふと思ふ。極く若い人にはさ

ういふことは興味を持たれないが、新聞の読者見たいに、少し年を取って居る者が多いといふ風になると、どうしても……。

この当時、科学記事を掲げていたのは『報知新聞』だけではなかった。同じく学芸欄をもつ『東京朝日新聞』も、あるいは文芸欄や学芸欄をもたない『東京日日新聞』もまた、さかんに科学の知識の普及に努めている。文芸と科学は「割に他の物よりか性質が近いですね」と佐近が述べているように、新聞メディアが想定する社会生活をいとなむ普通の読者たちにとって、科学とは「文明」に属する道具や手段ではなく、趣味や教養の豊かさをもたらす「文化」に属するものだったのである。

『報知新聞』は関東大震災前後の数年間、経営が順調で発行部数も伸び、もともと華やかな時代を迎える。多様な読者を想定すればするほど、偏りのある特色を打ち出した編集方針は立てにくく、おのずから穏健で標準的な見方を提示するものとならざるをえない。しかも、学芸欄のカテゴリーが広くなるにつれて、相対的に文芸の比重は軽いものとなっていくだろう。しかしその反面、そこには同時代の社会の変化や読者の一般的関心の傾向が映し出されているはずであり、学芸欄のもつ意味は決して小さくないと考えられる。

注

- (1) 紅野敏郎編『読売新聞文芸欄細目』下巻(一九八六・七、日外アソシエーツ)巻末の「各年別・解説」に詳しい。

- (2) 池内輝雄「時事新報断章」(『時事新報目録 文芸篇 大正期』所収、二〇〇四・一二、八木書店)参照。
- (3) 土方正巳『都新聞史』(一九九二・一一、日本図書センター)。
- (4) 『朝日新聞社史 大正・昭和戦前編』(一九九一・一〇、朝日新聞社)。
- (5) 『新聞五十年史』(一九四三・四、鱗書房)。
- (6) 『報知七十年史』(一九四一・六、報知新聞社)。
- (7) 『報知新聞』時代の野村胡堂については、谷口幸代「野村胡堂の誕生——『報知新聞』 文芸欄を視座として——」(『出版研究』二〇一〇・三)が詳しく、本稿も多くの示唆を得ている。
- (8) 野村胡堂『面会謝絶——胡堂対あらえびす』(一九五一・一二、乾元社)。
- (9) 拙稿「『報知新聞』 文芸連載読物(明治・昭和戦前) 覚書」(『関西大学文学論集』二〇二五・三)。
- (10) 『胡堂百話』(一九五九・一一、角川書店)。
- (11) 開設まもない文芸欄に掲げられた記事には、有島武郎のものがそうであるように、担当記者による談話筆記が少なからず含まれていると考えられる。『有島武郎全集』第九巻(一九八一・四、筑摩書房)は、その日記の記述により『報知新聞』 文芸欄に掲載された「繰り返しの生活を憎む」(一九二二・六・二三、二四)を談話筆記と断定し、有島の他の同欄の記事も談話筆記に分類している。
- (12) 注(10)に同じ。
- (13) 欄名は一九二三年三月一日から「学芸」に改められた。また、「科学と発明」欄は、関東大震災後しばらく休載となるが、一九二四年一月二二日から「科学」と改称して再開された。
- (14) 『日本新聞年鑑 大正十三年版』(一九二四・七、新聞研究所)。
- (15) 足立貞一「佐近君と郷里」(『作品主義』一九三一・四)。
- (16) 三木清「読書遍歴」(『読書と人生』所収、一九四二・六、小山書店)。

付記

本研究は、科研費 22K00308 の助成を受けたものである。

(関西大学文学部教授)